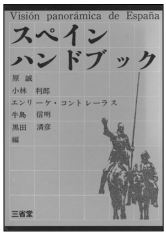
第59回イスパニア会例会講演要旨（令和4年6月26日）

スペイン史と国民史学

―『スペイン史 10 講』を上梓して

講師：立石 博高（1976年卒、前東京外国語大学学長）



私が西洋史研究の道に入ってから、じつに半世紀近くの時が流れています。その間、近世から近代にかけてのさまざまなテーマについて個別実証研究を積み重ねてきましたが、同時にスペインの歴史の全体像を描くということも自分の課題としてきました。

後者に関しては、私が都立大学大学院博士後期課程に進学して間もなく、故原誠先生から『スペイン ハンドブック』（三省堂、1982 年 5 月刊行）の「歴史」の章を執筆する機会をいただいたことが画期となりました。当時私は 16 世紀スペインの反王権諸都市反乱についての研究しか深掘りしていなかったので、この暖かいご依頼に少なからず躊躇したことを覚えています。そこで大学院の指導教員であった故遅塚忠躬先生に相談したところ、ぜひチャレンジすべきだと言われました。わが国の西洋史研究は「戦後歴史学」のなかで指導的役割を果たしましたが、1970 年代に入るとそれまでの鋭い理論化の成果を破綻させる実証研究が現れ始めていました。その一方で個別実証研究の過度の重視から、一国史の全体像を示す著述、さらに個別研究を全体像のなかに取り込む姿勢が後退する状況にありました。遅塚先生は、通史を書くということは、幅広い成果をめざす研究者にとって大いに意義があると私に教えてくださったのです。

以後、私は個別実証研究を進めると同時に、次のような通史関連の書物を著してきました。

(1) 原誠ほか編著『スペイン ハンドブック』（三省堂、1982 年）
(2) 立石博高・若松隆編著『概説スペイン史』（有斐閣、1987 年）
(3) 立石博高・関哲行・中川功・中塚次郎編著『スペインの歴史』（昭和堂、1998 年）
(4) 立石博高編著『スペイン・ポルトガル史』（世界各国史 16、山川出版社、2000 年）
(5) アントニオ・ドミンゲス・オルティス（立石博高訳）『スペイン 三千年の歴史』（昭和堂、2006 年）
(6) 関哲行・立石博高・中塚次郎編著『世界歴史大系 スペイン史』（全 2 巻、山川書店、2008 年）
(7) J・アロステギ・サンチェス他（立石博高監訳）『スペインの歴史――スペイン高校歴史教科書』（明石書店、2014 年）
(8) 立石博高・内村俊太編著『スペインの歴史を知るための 50 章』（明石書店、2016 年）
(9) 立石博高著『スペイン史 10 講』（岩波新書 1896、岩波書店、2021 年）
(10) 立石博高編著『スペイン・ポルトガル史 上・下』（YAMAKAWA SELECTION、山川出版社、2022 年）
(11) 立石博高・黒田祐我共著『図説スペインの歴史』（河出書房新社、2022 年）

これらのなかで、(4)では中世までのスペインとポルトガルの歴史を「イベリアの歴史」として総体的に描く試みを行ない、国民国家スペインの歩みを近世以前から見よう

とする国民史学（ナショナル・ヒストリー）を批判しました。また(6)では全体を二部構成として、第Ⅰ部を「スペインの歴史」、第Ⅱ部を「歴史的地域からの視座」とし、第Ⅱ部ではカタルーニャ、バスク地方、ガリシアの各地域の歴史を扱いました。現存国家のスペインを所与のものとする国民史に一石を投じたかったからです。

さらに岩波新書『10講』シリーズでスペイン通史(9)執筆の機会を与えられました（古代から現代までの全体を一人で執筆するのは『スペイン・ハンドブック』以来でした）。本書では、フランコ独裁崩壊後に着実に進んだ内外の個別実証研究の成果を十分に取り込むとともに、「なめらかなストーリー」を叙述するのではなく、史実に関する国民史学批判を要所に組み込んで、国民主義的歴史からできるだけ距離を置くことを意図しました。自分のスペイン史との長いかかわりの中で培ってきた「国民史学（ナショナル・ヒストリー）に警戒し、それが創りあげてきた国民アイデンティティに批判的眼差しを向けること」を少しでも読者諸兄姉と共有したかったからです。

この度の私の報告では、スペイン国民を一体として称揚する国民史学（フランコ独裁時代にそれは「ナショナル・カトリシズム」に結晶した）批判を盛り込んだ個所を重点的に取り上げて、史実とは言い難いできごとを史実化する作為、つまり歴史の「神話」化への警戒を喚起しました。一例をあげておきます（47‐48頁）。

《後述するフランコによる20世紀の長期独裁体制が唱えた歴史認識は、19世紀に創られた伝統的国民史学に支えられていた。722年のコバドンガの戦いから1492年のグラナダ陥落までの約800年は「レコンキスタ」の時代と称され、それを主導したのはカスティーリャ王国に結実するキリスト教諸国の歴代国王で、西ゴート王国の血筋を継承した者たちとされた。統一的カトリック王国の「復興」として、王権の歴史的正統性が謳われたのである。

だが、異教徒からの国土奪還という理念は、当初にはなかった。「レコンキスタ」という言葉は中世には使われていない。（中略）

レコンキスタが明確に十字軍の色彩を帯びるのは12世紀になってからである。アンダルスでムラービト朝、ムワッヒド朝が支配者となり、キリスト教諸国との対立が深まったからである。ローマ教皇が唱えるイスラームに対する十字軍は、イベリア半島のキリスト教諸国にもレコンキスタの機運を盛り上げた。その結果、1212年のラス・ナバス・デ・トローサの戦いでの勝利となった。》

本書の帯には、「著者メッセージ」を載せてもらいました。《地域文化の豊かさを誇るスペインは、世界中の人を魅了する。しかしこの国の人びとが多様性・多文化性を肯定的価値として共有するにいたるまでには、かずかずの歴史的困難を乗り越えなければならなかった。本書は、国民の一体性を称揚する「国民史学」に絡み取られないように注意しながら、その複雑な歴史をたどることをめざしている。》

なお、図版をふんだんに盛り込んだ分かりやすい通史として別途、黒田祐我さんとの共著(11)を出版しました。多くの皆さんが、『10講』と『図説』を併せて読んでくださることを期待しています。